

仕事と家庭間で生じる役割間葛藤と父親の発達との関連 —共働き家庭の父親の場合—

森下 葉子*

現代では父親にも仕事と家庭の両立が求められている。また、育児を通して父親自身も発達することが諸研究から明らかにされている。育児行為を通して経験したことが父親の発達を促すと考え、本研究では育児を通しての経験として役割間葛藤を取りあげた。

本研究の目的は、家庭—仕事間で生じる役割間葛藤と父親の発達との関連、及び、役割間葛藤の経験が発達に結びつく際に有効なサポートを明らかにすることである。保育所の協力のもと配偶者が有職の父親300名を対象に質問紙調査を行った。その結果、家庭役割でのストレスが原因で生じる葛藤が高い父親は、父親になったことで家族への愛情が深まったとは感じていなかった。また、家庭に費やす時間によって生じる葛藤が高い父親は、父親になったことで自身の人格的成長や子どもへの関心が広がったと感じていた。次に、葛藤の経験が高くても自身の発達を実感できる父親と実感できない父親について、夫婦関係や職場環境の比較を行った。その結果、家庭に費やす時間によって生じる葛藤が高くても、父親になったことで子どもへの関心が広がったと感じている父親は、家庭に対して職場の理解を得ていることが明らかにされた。

Key Words : 父親, 役割間葛藤, 親になることによる発達, 共働き家庭, 夫婦関係満足感

1. 問題の背景と目的

父親の育児関与への期待は年々高まっている。かつては「夫は仕事、妻は家庭」と言われていた家庭における性別役割分業は、「夫は仕事、妻は仕事と家庭」という新性別役割分業を経て、今では「(子どもが小さいうちは) 夫は仕事と家事・育児、妻は家事・育児」という新・新性別役割分業へと変化している(神原, 2004)。そうした父親への期待に伴い、父親に関する研究

* 人間学部児童発達学科

は1980年代後半から蓄積され、父親が積極的に育児にかかわることは、子どもの心身の発達や母親の育児ストレスの緩和につながるだけでなく、「柔軟さ」や「視野の広がり」、「責任感の高まり」等の父親自身の内面の成熟を促すことが明らかにされている（柏木・若松，1994；森下，2006；Palkovitz, Copes, & Woolfolk, 2001；新谷・村松・牧野，1993）。

なぜ、育児へのかかわりは父親の人格的発達を促すのだろうか。育児という世話や遊び行為を通して父親は何を経験しているのだろうか。これまでの研究では、その多くが、遊びや世話等の直接的な育児行為や母親へのサポートを介した間接的な育児行為の頻度と父親自身の発達との関連を検討している。しかし、育児に積極的にかかわった父親たちの記述から、それらの行為を通して彼らが様々な感情を経験していることが読み取ることができる。例えば、幼児期の長男との日常を記した藤原（2011）は、子どもと向き合い、対話を重ねる中で、驚きや喜び、苦悩、葛藤などを経験しており、それらが自身を成長させたと記している（藤原，2011）。

そこで、本研究では、父親の人格的発達を促す経験として育児に積極的に関与することで生じる葛藤や迷いに注目する。なぜなら、人は各発達段階で顕在化する葛藤や危機を乗り越えることによって発達していくと考えられているからである。成人期には、他者の成長を支え、次世代を育成することと自己実現に専心することとの間で葛藤が生じる（Erikson, 1963/1977）。仕事役割と家庭役割の両立は、親にとっては、自己実現と他者の成長への援助の両立ともいえる。

先に述べたように、父親による育児と仕事の両立が求められるなかで、父親自身が積極的にかかわりたいと願っていても、その多くが、往復の通勤や残業の時間も含む長時間勤務や休日出勤等によって、思うような家庭役割がとれずに葛藤を抱えている現状も報告されている（福丸，2000；森下，2007）。保育園や幼稚園に通う子どもをもつ父母の家庭役割と仕事役割の関係について検討した福丸（2000）では、協力者のうち約6割の父親が家庭と仕事の役割間で葛藤を感じていることを明らかにしている。それは特に、共働き家庭の父親に多く見られ、各役割に対する肯定・否定の感情の中で自分なりのバランスをとろうとする姿が示されていた（福丸，2000）。

では、仕事役割と家庭役割の間で生じる葛藤は父親の人格的発達にどのように影響するだろうか。多重役割に関する研究では、役割が増えれば増えるほど抑うつ感やストレスが高まるという考えを欠乏仮説という。この仮説は、①人のエネルギーには限度がある、②社会の秩序は各人の忠誠を必要とするものである、という2つの前提から成り立っている（Barnett, & Baruch, 1985）。個人がもっているエネルギーや時間には限度があるため、役割が増えた分、各役割に費やすことのできるエネルギーや時間は減ってしまい、減った時間やエネルギーを使用して求められる役割を遂行しようとするため、余裕がなくなりストレスや抑うつ感を引き起こすと考えるのである。これまでの研究では、複数の役割を同時に遂行することで生じる葛藤は、個人の精神的健康や配偶者との関係に悪影響を及ぼすことが明らかにされている（加藤，2004；小泉・菅原・前川・北村，2003）。この立場から考えると、仕事役割に家庭役割が加わったことにより、

仕事に費やしていたエネルギーや時間が減少し、仕事に益々専心しなければならないとなると、父親としての自身を振り返ったり、自らの成長を実感する余裕はもてないだろう。

これに対して、多重役割を担うことは個人の幸福感や満足感を高めるという考えもある。これを増大仮説という。増大仮説について小泉（1997）は「人間のエネルギーを限界のあるものでなく、むしろ伸張できるものと捉え、多重役割によってエネルギーを消耗するのではなく、かえって様々な資源を蓄積するため、多重役割は役割従事者の満足感、心理的幸福感を高め、負担感、抑うつ、不安、心理的ディストレスを低め、精神的健康を高める」と定義している。この立場に立つと、育児役割と仕事役割を両立させるために、周囲の資源を有効に活用しながら、自らも能力をあげようと努めることが、結果的に父親になったことで発達したという実感に寄与すると考えられる。

複数の役割を調整し、葛藤しながら父親として発達していくのであれば、育児期にある親が多重役割においてどのような葛藤を抱えているのか、また、それが親としての発達にどのような影響を及ぼすのかを検討することは、発達と葛藤との関連を明らかにするという点からも意義があると考ええる。

さらに、本研究では、役割間葛藤を経験することが父親の発達に寄与する場合、そこにはどのような環境要因があるのかを検討する。環境要因として、先行研究において役割間葛藤や役割間で生じるスピル・オーバーと関連が認められた夫婦関係満足感、仕事の忙しさ、職場の家庭への理解をあげる。

2. 方法

2008年3月に都下の私立・公立保育所を通して、在園児の父親970名への調査用紙の配布及び回収を行った。なお調査協力依頼に際し、個人は特定されないこと、回答内容が保育所に伝わることがないことを明記し、調査用紙には回収用封筒を付して配布した。

調査内容は以下の通りである。

①家庭役割と仕事役割における役割間葛藤

渡井・錦戸・村嶋（2006）が作成した尺度を使用した。本尺度は、葛藤を、「時間に基づいた葛藤」、「ストレスに基づいた葛藤」、「行動に基づいた葛藤」の3要因に分け、さらに、それぞれを家庭生活から仕事、仕事から家庭生活の2方向からとらえ、6因子構造をもつ、18項目からなる尺度である。回答は「全くあてはまらない（1点）」から「たいへんあてはまる（5点）」5段階で回答を求めた。得点の高さは役割間葛藤の高さを示す。

②父親になることによる発達

森下（2006）の父親になることによる発達尺度のうち、十分な信頼性が得られていない「自由の喪失」因子に含まれる3項目（「時間的余裕がなくなった」「行動範囲が狭まった」「経済的な余裕がなくなった」）を除く27項目を用いた。各項目について、親になる前と親になった後で

どの程度変化したと感じているかを尋ね、①と同様の5段階で回答するよう求めた。なお、親になる前後で特に変化しなかった場合は「全くあてはまらない」と回答するよう教示した。

③職場の環境

職場の環境として、家庭に対する職場の理解に関する4項目（「上司や同僚は私の家族の事情や状況に理解がある」「私の職場は、家庭の話をするような雰囲気がある」等）と仕事の忙しさに関する5項目（「常に仕事に追われている」「常に自分の能力以上の仕事をしなければならない」等）について①と同様の5段階で回答するよう求めた。

④夫婦関係満足感

袖井・都築（1985）の尺度を参考に作成した、「私は妻といると安らいだ気持ちになれる」「妻は私がこれまで成し遂げてきたことを認めてくれていると思う」等の12項目について、①と同様の5段階で回答を求めた。

⑤属性

調査協力者の属性として、年齢、結婚年数、配偶者の職業、本人の職業、子どもの数、子どもの性別と年齢、調査用紙を持ち帰った子ども（以下、対象児とする）の年齢、性別、出生順位を尋ねた。

3. 結果

1) 調査協力者の属性

有効回答の得られた324部（有効回答率33.4%）のうち、配偶者が有職である300名を分析対象とした。協力者の平均年齢は、37.7歳（SD=5.55）で年齢幅は21歳から58歳まで及んだ。職業は、被雇用者が全体の84.6%（常勤：81.0%，非常勤：3.3%），自営・自由業が13.0%，無職が1.3%，その他が1.0%であった。1日の平均労働時間（通勤・昼食休憩を含む）は10.7時間（SD=2.41），1週あたりの休日数は平均1.72日（SD=.57）であった。配偶者の職業形態は、フルタイムが全体の74.3%，パートタイムが24.0%，その他が1.7%であった。対象児の平均年齢は3.9歳（SD=1.51），性別は男児51.7%，女児46.3%であった。また、出生順位は第1子60.3%，第2子28.7%，第3子6.7%，第4子2.0%，第5子，第6子が各0.3%であった。

協力者の年齢に幅があり、それに伴い対象児の出生順位が多様であった。これらは特に父親になったことによる発達の実感に影響すると考えられたため、「父親になることによる発達」の27項目と協力者の年齢、対象児の出生順位の相関を調べた。その結果、協力者の年齢は「地域活動・ボランティア活動に積極的に参加したいと思うようになった」と弱い正の相関が認められた（ $r=.165$, $p<.01$ ）。また、対象児の出生順位との間に有意な相関が認められたのは、「自己研鑽に励むようになった」「地域活動・ボランティア活動に積極的に参加したいと思うようになった」「子どもを通して付き合いの幅が広がった」「思慮深くなった」の4項目であった。

2) 変数の整理

得られた回答について、SPSS (Ver.18.0) を用いて以下のように整理し得点化した。

①家庭役割と仕事役割における役割間葛藤 家庭・仕事における役割間葛藤について因子分析（重み付けのない最小二乗法，Promax 回転）を行い，固有値の元帥状況と因子の解釈可能性を考慮し，4 因子を抽出した（Table1）。第1因子は，家庭（職場）で有効な行動や態度と職場（家庭）で求められる行動や態度が互いに対立したり矛盾していることによる葛藤を示す項目に高い負荷を示していたため，「行動面の対立・矛盾による葛藤」とした。第2因子は，仕事に費やす時間やそこでのストレスによって家庭役割を満足に遂行できないという項目に高い負荷を示していたため，「仕事時間・ストレスが家庭役割へもたらす葛藤」とした。第3因子は，家庭でのストレスが仕事役割の遂行を妨げる項目に高い負荷を示していたため「家庭でのストレスが仕事役割へもたらす葛藤」とした。第4因子は，家庭や家族に費やす時間によって仕事役割の遂行が妨げられる項目に高い負荷を示していたため，「家庭に費やす時間が仕事役割へもたらす葛藤」とした。信頼性を示す α 係数は .85 ～ .91 であった。各因子に高い負荷を示した項目の単純合計を項目数で除した値を尺度得点とした。

②父親になることによる発達 27 項目について因子分析（重み付けのない最小二乗法）の後，Promax 回転を行った。因子負荷量が |.40| に満たない項目と2因子以上に高い負荷を示した項目を除いて，再分析した結果，4つの因子が抽出された（Table2）。各因子に高い負荷量を示した項目の内容から，第1因子を「人格的成長」，第2因子を「家族への愛情の深まり」，第3因子を「過去と未来への展望」，第4因子を「子ども全般への関心の広がり」とした。 α 係数は .69 ～ .89 であった。①と同様に尺度得点を作成した。

③職場の環境 職場の環境に関する9項目について因子分析（重み付けのない最小二乗法，Promax 回転）を行った。抽出された2つの因子について，各因子に高い負荷量を示した項目の特徴から，第1因子を「仕事の過重負担感」，第2因子を「家庭に対する職場の理解」とした（Table3）。 α 係数は，.83，.76 であった。①と同様に尺度得点を作成した。

④夫婦関係満足感 夫婦関係満足感12項目については，単純構造を確認するために主成分分析を行った。その結果1つの成分が抽出され，単純構造であることが確認された。 α 係数は .94 であった。①と同様に尺度得点を作成した。

各変数の平均値と標準偏差は Table4 の通りである。

Table1. 家庭一仕事における役割間葛藤の因子分析結果（重み付けなし最小二乗法 Promax 回転）

	Fac1	Fac2	Fac3	Fac4	h ²
Fac1 行動面の対立・矛盾による葛藤（$\alpha=.91$）					
18) 家庭で、問題をうまく解決する行動は、職場では有用でないように思う	.897	-.007	-.020	-.051	.778
17) 家庭では有効かつ必要な態度や行動は、職場ではむしろ逆効果だろう	.869	-.038	-.018	.024	.730
15) 職場では効果的な行動は、よい親や配偶者となるには役立たない	.839	-.005	-.038	-.017	.678
16) 家庭ではうまくいく行動が、職場では効果的でないように思う	.810	-.103	.036	.079	.653
14) 職場で、有効かつ必要な態度や行動は、家庭ではむしろ逆効果だろう	.787	.061	.015	-.051	.654
13) 仕事の際に使う問題解決行動は、家庭での問題解決には効果的でない	.569	.104	-.064	.058	.365
Fac2 仕事時間・ストレスが家庭役割へもたらす葛藤（$\alpha=.89$）					
3) 職務を果たすのに多くの時間を使うため、家族との活動ができないことがある	-.058	.870	-.124	.113	.713
2) 仕事に時間がとられるため、仕事と同様に家庭での責任や家事をする時間が取りにくい	.004	.869	-.156	.078	.721
1) 自分が家族と過ごしたい時間を、思っている以上に仕事にとられる	-.057	.817	-.098	-.057	.602
7) 仕事から帰った時、くたくたに疲れていて、家族といろいろなことをしたり、家族としての責任が果たせないことがよくある	.024	.734	.087	-.010	.593
8) 仕事から帰った時、精神的に疲れ切っていて、家族のために何もすることが出来ないことがよくある	.087	.686	.201	-.096	.617
9) 職場でのストレスのために、家に帰っても自分が好きなことさえ出来ないことがよくある	.087	.515	.375	-.037	.555
Fac3 家庭でのストレスが仕事役割へもたらす葛藤（$\alpha=.91$）					
11) 家庭での責任からくるストレスがよくあるので、仕事に集中するのが難しいことがある	-.051	-.088	.970	.018	.891
12) 家庭生活の緊張と不安のため、往々にして仕事をする能力が低下してしまう	.024	-.088	.870	.070	.796
10) 家庭でのストレスのために、職場でも家族のことが頭を離れないことがよくある	-.049	.083	.790	.002	.644
Fac4 家庭に費やす時間が仕事役割へもたらす葛藤（$\alpha=.85$）					
6) 家族としての責任を果たすために多くの時間を使うので、仕事の活動が犠牲になっている	-.003	-.082	-.002	.975	.931
5) 家族と時間を過ごすために、自分のキャリアアップに役立つ職場での活動に時間をかけられないことがよくある	.042	.023	.050	.716	.568
4) 家族としての責任に時間を費やすために、自分の職務が妨げられることがよくある	-.006	.128	.051	.690	.558
因子寄与	4.63	4.26	3.77	2.85	
相関係数 F2	.350**				
F3	.259**	.262**			
F4	.162**	.203**	.475**		

**p<.01

Table2. 父親になることによる人格的発達 因子分析の結果

(重み付けなし最小二乗法, Promax 回転)

	Fac1	Fac2	Fac3	Fac4	h ²
Fac1 人格的成長 ($\alpha=.89$)					
17) 思慮深くなった	.854	-.066	-.018	-.024	.633
16) 突発的に異変が生じてあまり動じなくなった	.827	-.010	-.034	-.098	.573
25) 他者に対して思いやりをもつようになった	.753	-.096	-.081	.260	.687
18) 物事の結果だけでなく、その過程を見るようになった	.748	-.019	-.002	.046	.582
24) 時間を大切にするようになった	.671	.087	.116	-.094	.533
21) 甘えがなくなった	.617	.081	.008	-.021	.436
8) 寛大になった	.483	.242	.002	-.055	.391
26) 自分の性格や考えを見つめ直すようになった	.434	.026	.083	.154	.362
7) 地域活動・ボランティアに積極的に参加したいと思うようになった	.418	-.008	.273	.002	.344
Fac2 家族への愛情の深まり ($\alpha=.87$)					
11) 家族の中で幸せだと感じるようになった	-.018	.875	-.069	-.061	.641
1) 家族への愛情が深まった	-.032	.770	.018	-.016	.563
19) 家庭で安らぎを感じるようになった	.034	.672	-.134	.173	.553
22) 人生における充実感を感じるようになった	.191	.612	.046	-.079	.517
27) 家族のことを考えるようになった	.222	.552	-.032	.090	.565
10) 家族への責任感が増した	.099	.510	.183	-.009	.463
4) 小さいのにいろいろ考えたりしている子どもと話すときと楽しいと感じるようになった	-.245	.458	.159	.256	.374
Fac3 過去と未来への展望 ($\alpha=.74$)					
13) 自分の親が自分をどのように育ててくれたのかを考えるようになった	.040	-.147	.805	.018	.591
20) 自分と親の関わりを思い出し、将来の自分と子どもとのかかわりを想像するようになった	.098	.058	.666	-.038	.524
15) 子どもをもつ親の気持ちが分かるようになった	.004	-.058	.496	.322	.486
2) 自分が子どもの頃を思い出すようになった	-.050	.198	.428	-.053	.246
Fac4 子ども全般への関心の広がり ($\alpha=.69$)					
14) 子ども好きになった	.248	.013	-.133	.682	.619
23) 自分の子ども以外の子どもに関心を向けるようになった	.053	.044	.104	.559	.468
6) 親子連れに関心を向けるようになった	-.174	.077	.226	.513	.392
因子寄与	6.92	6.35	4.41	5.23	
相関係数 F2	.621**				
F3	.457**	.483**			
F4	.571**	.574**	.517**		

**p<.01

Table3. 職場環境についての因子分析結果（重み付けなし最小二乗法 Promax 回転）

	Fac1	Fac2	h ²
Fac1 仕事の過重負担感（$\alpha=.83$）			
7) 常に自分の能力以上の仕事をしなければならない	.855	.095	.712
8) 常にわき目もふらず、仕事に没頭しなければならない	.778	-.022	.611
9) 常に自分の立場以上の責任が課されている	.768	-.051	.605
6) 常に仕事に追われている	.736	.060	.531
5) 職場内での競争が厳しい	.425	-.133	.218
Fac2 家庭に対する職場の理解（$\alpha=.76$）			
1) 上司や同僚は私の家庭の事情や状況に理解がある	-.079	.783	.640
3) 私の職場には、家族の話をするような雰囲気がある	.077	.771	.581
2) 私の職場は、家族が病気になった時の休暇取得など、個人的な理由を考慮してくれる柔軟性がある	-.089	.645	.443
4) 子どもを職場に連れて行く機会があれば、連れて行っても構わない	.060	.514	.258
因子寄与	2.73	2.01	
相関係数 Fac2	-.159**		

**p<.01

Table4. 各変数の記述統計

	平均値	標準偏差	度数
父親自身の人格的発達			
人格的成長	3.21	.80	299
家族への愛情の深まり	4.18	.73	299
過去と未来への展望	4.20	.68	298
子ども全般への関心の広がり	3.96	.81	300
役割間葛藤			
行動面の対立・矛盾による葛藤	2.71	.83	292
仕事役割から家庭役割への葛藤	3.00	.91	294
家庭でのストレスによる仕事への葛藤	1.90	.81	294
家庭時間による仕事への葛藤	2.40	.88	291
職場環境			
仕事の過重負担感	3.19	.86	293
家庭に対する職場の理解	3.54	.93	293
夫婦関係満足感	3.80	.76	296

3) 家庭・仕事における役割間葛藤と父親の発達との関連

家庭役割と仕事役割間で生じる葛藤と父親の発達との関連について検討するために、役割間葛藤の各変数を得点平均値を基準に高群・低群に分け、それぞれを独立変数とし、父親の発達の4変数を従属変数としてt検定を行った。その結果、「家庭でのストレスが仕事役割へもたらす葛藤」と「家庭に費やす時間が仕事役割へもたらす葛藤」の高-低群において、父親の発達の平均値に有意差が認められた（Table5）。具体的には、「家庭でのストレスが仕事役割へもたらす葛藤」の低群は、高群よりも「家族への愛情の深まり」が高かった（ $t(297)=-3.065$, $p<.01$ ）。また、「家庭に費やす時間が仕事役割へもたらす葛藤」の高群は、低群よりも「人格的成長」及び「子ども全般への関心の広がり」が高かった（ $t(297)=2.401$, $p<.05$; $t(293)=2.103$, $p<.05$ ）。

Table5. 役割間葛藤の高群と低群による父親の人格的発達の平均値 (SD) の比較

	家庭でのストレスによる 仕事への葛藤				家庭時間による仕事への葛藤			
	高群 M	低群 M	t 値	df	高群 M	低群 M	t 値	df
人格的成長	3.27 (.74)	3.14 (.86)	1.368	297	3.34 (.75)	3.11 (.83)	2.401*	297
家族への愛情の深まり	4.06 (.72)	4.31 (.71)	-3.065**	297	4.17 (.65)	4.18 (.78)	-.179	297
過去と未来への展望	4.17 (.63)	4.22 (.74)	-.640	296	4.26 (.57)	4.15 (.74)	1.417	294
子ども全般への関心の広がり	3.94 (.81)	3.98 (.82)	-.415	298	4.07 (.71)	3.88 (.87)	2.103*	293

**p<.01, *p<.05

4) 役割間葛藤が父親の発達に至る背景要因の検討

先の分析で、父親の発達と関連が認められた「家庭ストレスが仕事役割へもたらす葛藤」及び「家庭に費やす時間が仕事役割へもたらす葛藤」について、その背景要因を検討した。まず、各葛藤変数の高群をさらに、関連が認められた発達変数の高-低群に分けた。具体的には、「家庭ストレスが仕事役割へもたらす葛藤」高群をさらに「家族への愛情の深まり」得点の高群と低群に分け、「家庭に費やす時間が仕事役割へもたらす葛藤」についても「人格的成長」と「子ども全般への関心の広がり」において同様の処理を行った。それぞれを「家庭ストレス葛藤H-家族への愛情H / L」群、「家庭時間葛藤H-人格的成長H / L」群、「家庭時間葛藤H-子どもへの関心H / L」群とした。役割間葛藤と父親の発達との組合せごとにH-H群とH-L群間での仕事の過重負担感、職場の家庭への理解、夫婦関係満足感の得点の平均値を比較した。

その結果、「家庭ストレス葛藤H-家族への愛情H」群と「家庭ストレス葛藤H-家族への愛情L」群では、「家庭ストレス葛藤H-家族への愛情H」群の方が、夫婦関係満足感が有意に高かった ($t(157)=4.033$, $p<.01$)。また、「家庭時間葛藤H-子どもへの関心H」群は、「家庭時間葛藤H-子どもへの関心L」群よりも家庭に対する職場の理解が高い傾向が示された ($t(1.770)=p<.10$)。なお「家庭時間葛藤-人格的成長」のH-H群とH-L群では、いずれの変数についても有意差は認められなかった。

4. 考察と今後の課題

本研究では、多重役割を担うことによる役割間葛藤と父親自身の発達との関連について、家庭役割でのストレスが仕事役割の遂行を妨げることで生じる葛藤が低い父親の方が、そうでない父親よりも、父親になったことで家族への愛情が深まったと感じていた。家庭役割と仕事役割の不均衡はどちらか一方の役割に対する負担感となる。この場合、家庭役割の遂行自体がストレスになるため、その対象である家族に対しても負担感を抱くのは当然ともいえる。家庭役

割でのストレスによって仕事が妨げられるという葛藤を抱きつつも、父親になったことで家族への愛情が増したと実感できる場合と、そうでない場合では、夫婦関係満足度に違いがみられた。つまり、家族への愛情が増したと実感している人の方が、配偶者との関係に満足していたのである。多くの先行研究で示すように役割間葛藤は配偶者との関係に悪影響を及ぼすが、一方で、父親の役割間葛藤もまた配偶者との関係の影響を受けて、緩和あるいは助長されるといえる。家庭における夫婦関係の在り方が、夫と妻それぞれの仕事と家庭の両立に深く寄与していることは、この結果からも明らかである。

また、家庭に費やす時間が仕事役割の遂行を妨げることで生じる葛藤が高い方が、父親になることで人格的成長や子ども全般への関心の広がりの実感を抱いており、小泉（1997）のいう増大仮説を支持する結果となった。限られた時間のなかで複数の役割を果たすためには、先を見通したり、周囲の状況を判断して行動するなどの能力が求められる。この葛藤を抱えながら自らの発達（子ども全般への関心の広がりに限るが）を実感している群では、家庭に対する職場の理解を得ていた。元来、家庭への理解がある職場であったのか、それとも理解を得ようと努めた結果であったのかは本研究のデータから判断することはできないが、両立を図るために、職場の理解を得ようとした結果、自らの発達を実感するに至った可能性もある。いずれにしても家庭と仕事の両立を支援する制度や雰囲気が整っていることは、父親の育児関与を推進する上で必要不可欠である。

本研究では、多重役割を担うことで生じる役割間葛藤と父親自身の発達との関連について検討してきた。我が子の誕生により自動的に「父親になる」と「父親をする」ことは異なるといわれている（柏木，2011；大野・柏木，2008）。「父親をする」こと、すなわち、育児に積極的に関与することが父親自身の発達を促すと考えられている。これまでの父親に関する研究では、世話や遊び等の育児行為をどの程度日常的に行っているかについて検討しているものの、育児を通しての経験そのものについては明らかにされていない。母親と同様、育児は彼らにとっては新奇な行為である。それ以前にも複数の役割を担っていたが、親は親役割のみに従事しているわけではない。家庭の中では、夫あるいは妻としての役割があり、職場に行けば仕事に責任をもつ職業人としての役割に従事している。その新たに加わった役割を受容し、遂行することは容易なことではない。親役割とそれ以外の様々な役割を調整しながら、親として生きているのである。役割間葛藤を抱えながらも父親としての自らの発達を実感しながら、親として生きるためには、周囲に「父親であること」や「父親をすること」を理解してもらえ環境に身を置いていることが重要である。父親が役割間葛藤を抱えながらもそうした実感をもつことは、父親としての自信につながり、育児へかかわることへの動機づけにもなるだろう。

最後に今後の課題について述べる。葛藤を抱えながらも自身の発達を実感できる要因について、本研究では父親の育児を支える資源として配偶者や職場の上司や同僚等の人間関係をあげて検討し、そうした人間関係が重要であることを示したが、葛藤経験が自らの発達を実感に至るまでのプロセスについては十分検討できなかった。多重役割における葛藤と抑うつや幸福感

との関連を検討した研究では、葛藤への対処方略によって、抑うつが高まるのか、幸福感が高まるのかが異なっていた（加藤・金井，2006）。今後は本研究で関連が認められた配偶者との関係や職場の人間関係を父親本人がどのように資源として認識し、利用しているのかについては検討することで、父親への支援の展望を提示できるのではないかと考える。また、父親が育児を通して経験していることは役割間葛藤にとどまらない。彼らが子どもとのかかわりを通して経験していることについて、聞き取り調査等から明らかにしていくことで、さらに「父親」についての理解が深まると考える。

引用文献

- Barnett, R. C., & Baruch, G. K. (1985). Women's involvement in multiple roles and psychological distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49(1), 135-145.
- Erikson, E. H. (1977). 幼児期と社会 I. (第二版). (仁科弥生, 訳). 東京: みすず書房. (Erikson, E. H. (1963). *Childhood and society*. Vol.1. (Second ed). New York: W. W. Norton.)
- 藤原和博 (2011). 父親になるということ. 東京: 日本経済新聞社
- 福丸由佳. (2000). 乳幼児を持つ親の多重役割と抑うつ度との関連: 父親を中心としたインタビューによる調査結果から. *人間文化論叢*, 3, 133-143.
- 神原文子 (2004). 家族のライフスタイルを問う. 東京: 勁草書房
- 柏木恵子 (2011). 父親になる, 父親をする: 家族心理学の視点から. 東京: 岩波ブックレット
- 柏木恵子・若松素子. (1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, 5, 72-83.
- 加藤容子 (2004). 夫婦ペア・データによるワーク・ファミリー・コンフリクトの検討. *経営行動科学学会年次大会発表論文集*, 7, 174 - 180.
- 加藤容子・金井篤子 (2006). 共働き家庭における仕事家庭両立葛藤への対処行動の効果. *心理学研究*, 76, 511-518.
- 小泉智恵. (1997). 仕事と家庭の多重役割が心理的側面に及ぼす影響: 展望. *母子研究*, 18, 42-59.
- 小泉智恵・菅原ますみ・前川暁子・北村俊則 (2003). 働く母親における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが抑うつ傾向に及ぼす影響. *発達心理学研究*, 14(3), 272-283.
- 森下葉子 (2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因. *発達心理学研究*, 17(2), 182-192.
- 森下葉子 (2009). 子どもの誕生による父親の発達の变化. *東京学芸大学紀要総合教育科学系* 60, 9-18
- 大野祥子・柏木恵子 (2008) 親としての男性: 父にはなるが, 父はしない? 柏木恵子・高橋恵子 (編) *日本の男性の心理学: もう1つのジェンダー問題* 第4章 Pp153-173. 東京: 有斐閣
- Palkovitz, R., Copes, M. A., & Woolfolk, T. N. (2001). "It's like...you discover a new sense of being": Involved fathering as an evoker of adult development. *Men and Masculinities*, 4(1), 49-69.
- 新谷由里子・村松幹子・牧野暢男. (1993). 親の変化とその規定因に関する一研究. *家庭教育研究所紀要*, 15, 129-140.
- 袖井孝子・都築佳代. (1985). 定年退職後夫婦の結婚満足度. *社会老年学*, 22, 63-77.
- 渡井いずみ・錦戸典子・村嶋幸代. (2006). ワーク・ファミリー・コンフリクト尺度 (Work-Family Conflict Scale: WFCS) 日本語版の開発と検討. *産業衛生学雑誌*, 48(3), 71-81.

(2011.10.5 受稿, 2011.11.4 受理)